
狂喜乱舞

FRAUD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂喜乱舞

【Nコード】

N0339Y

【作者名】

FRAUD

【あらすじ】

ねえ、此処どこ？

其処は素晴らしく面倒くさい世界でした。

面倒くせえ…。ぶっ壊そうかな。

なあ、無意味な世界に終焉を迎えさせてもいいよな？

だって、すんげえ面倒だし。

狂話

神はときに残酷な選択を迫る。

というか、面倒ごとを押し付ける。

そもそも神などいるのか。

まあいたとしても、俺は神など崇めない。

敬いも、拝むことも、何もしない。

だって、本当にいるかはともかく…

見えないんじゃないじゃあ意味ないじゃん。

そうだろう？

存在さえ解らぬ、見えもせぬ相手をどう扱えと？

人間はすぐ、何かに縋り願い請う。

何でそうなのか、俺には理解できない。

そもそも人間という生き物自体が理解できない。

人の心を読めと言われても無理だ。

それと同様。

空気を読めと言われても不可能だ。

だって、勝手に作り出された空気。それも、他人の空気だとか周りの自分に関係しない空気だとかその雰囲気を感じとるなど無理な話だ。

それ以前に俺は人に合わせることが大嫌いである。

人間なんて嫌い。

人間は勝手だ。

人間は醜い。

人間は最悪だ。

人はすぐに”輪”を作る。

人とのつながり。

友達、友人、親友

知り合い、顔見知り

家族、親戚、親族

近所の人、地域の人

店の人、会社の人

同じ学校の人、同じ習い事の人

嗚呼

人間って

面倒くさい

「ただ、血に染まることは綺麗だと思う」

僕は思う。

「ただ、醜く互いに殺しあってる姿は滑稽に見える」

僕は見ている。

「ただ、互いにバカなくらいに警戒し信頼し生きてる姿がとても面倒そうだ」

僕は考えた。

そんな僕も”人間”だなんて、許されるわけが無い。

だって、僕は”人間が一番嫌いだから。

ときに本能的に動くあの姿はとても醜い。

ときに謀ろうと謀られ陥れられては陥れる姿はとても滑稽。

ときに感情的に泣き笑い怒り喜ぶ姿は実に不可思議。

僕は笑うというものを知らない。

僕は泣くというものを知らない。

僕は怒るというものを知らない。

僕は喜ぶというものを知らない。

何も知らない。

何も知らなくていい。

だって、

人間と同じ行動なんて吐き気がするもの。

「先生！149号室の患者がまた！！！」

「何!？」

嗚呼、人生というのは何故これほどまでに退屈なのだろうか？

嗚呼、人間というものは何故これほどまでに醜いのだろうか？

自分など存在しなくていい。

他人など存在しなくていい。

何も、何も存在しなくていい。

だって、とてもとても面倒くさいから。

ピッピッピッピッ……

嗚呼、今日も退屈な人生を与えられてしまった。

嗚呼、今日も退屈な人生を生きなくてはならなくなってしまった。

嗚呼、全く、人間というものは本当に面倒くさい。

「君、聞いているかね？」

うるさいんだ…

「また、自殺をはかったそうだね？」

だってつまらないじゃん…

「どうしてそうやって命を、大切なものを粗末にするかな？」

生きてたって意味ない。それだったら死んで、た…ほう
が…

「拘束具が君に影響させているのだったらずくに外させるところだが、君は何度も同じことを繰り返す。精神状態はともかく脳波に以上は見られない。つまりは、君は呼吸をするのと同じように自殺を繰り返すのかね？」

そんなこと知らない。僕には関係のないこと。理解できない。死を選ぶことが何故ダメなのか。

「君の精神状況は理解できない。私は心理学を中心に人間の生体について色々調べているのだが君ほどまでに無の状態です死を簡単に選ぶ人間は初めてだ。どんな殺人鬼でも殺される、死ぬ時に戸惑い、躊躇があるものだ。そして、最後に涙を流す」

涙？ああ、目から出る水。アレは理解不能。泣くときにも、怒るときにも、喜ぶときにも涙というものを流す。僕には至極不可思議。あれは何なのか。

「もし、君を野良のように放したらどうなるのか実に興味深い。君は外を知らない。君はまだ世界を知らない。ずっとずっとこの世界、いや、この薄暗く、自然の光さえ差し込まぬ人工の光、人工のもので作られたこの部屋でしか過ごしたことの無い君には解らないだろう。外は広い。人間を嫌う君。自分を嫌う君でも好きになれるものがあるかもしれない。僕はそういった衝動にひどく駆られていてね。どうかね？」

はは。人間のいる世界などなくていい。お前もいなくていい。僕も。全て全て。無に還れば良い。

そう。

世界はいつか

終わるだろう。

悲劇か

喜劇か

終焉は今すぐ、そこまで迫っているかもしれないんだから。

狂放

世間はバカばかり。

何て言ってみれば、やはり世の中は面倒くさい。

嗚呼。本当に。

「ねえ…これから…あの…用事とかある？無かったら一緒に…」

女。

臭い匂いを体に撒き散らし、ここぞとばかりに擦り寄っては大層ご自慢らしい体を見せつけてくる。

無駄に開けたシャツから見える豊満な脂肪。

やけにテラテラと光らせる唇。

小さく見せようと、髪にボリウムを出してアンバランスになる体系。

ぶつとい足を見せつけなくてもいいものを、スカートを必要以上に曲げて、折って、ベルトで押さえて…

嗚呼、何故それほどまでに”欲張る”？

「ごめんね。これから、ちょっといかなきゃいけないところあるんだ」

「そ、そうなんだ…あ、じゃあいつか空いてる日 ないかな？一緒に帰りたいんだけど」

「いや…しばらくは無理かな。部活もあるし、もうすぐテスト近から勉強しないといけないし…」

誘う。

断る。

泣く。

告る。

笑う。

苦笑。

… 一体何度繰り返せばよいのだろうか？

「そう…じゃあ、また明日」

女は手を振ってバイバイと言って去る。

僕はそれに「さようなら」と言って去る。

そこからスタートする。

欲に溺れ、嫉妬に渦巻き、感情的になる女ども。

「あんだ、マジうざい」

「どっいつつもり？」

「ああ、ご自慢の胸でも見せて媚びようとしたんだ？」

「相手にされなかったみたいけどね」

女は黒い。

腹黒く、自分が一番でないと気が済まない。
可笑しい。

笑いたくなるほど、クルッテル。

「強欲な女は嫌われる…嫉妬は最高だね」

解き放たれた狂気は自分を崇拜するように群れる女どもを狂わせた。

同様に、男どもを嫉妬と憎悪の渦に巻き込み、さらに狂わせた。

「こんなのが、世間では売れるなんてね」

甘い顔。

人を魅了し、寄せ付ける一つ一つの言葉。

”猫を被る”というわけでもなく、完璧なる性格。

好き嫌いがはつきりしているわけではなく、”好き”ということに大して重視し、楽しむ。

常に笑顔。

それは、女を深く深く己れへと溺れさせた。

「罪は俺の存在か、人間という物体の存在か」

今はまだ解らない。

それでも、”俺”は楽しむ。

人間とは、醜くも儂く、淡く美しいものだったりする。

哀しみに溺れ、狂気に身を委ね、悪意に満ち溢れては怒気を発す。

涙に感情を洗われ、安心しては自分の”生き甲斐”を探す。

見つからなければ”自殺”という選択。

「俺は、つまらぬことで生を長引かせたくなかったのだろうか？」

自問。

「否。死は興味深き物。人の感情と意思。そして本能」

自答。

ああ…実におもしろい。

人生を楽しむという持論は持ち合わせてはいない。

むしろ、その人生を台無しにしてこそ今の俺の”生き甲斐”だとか思ったりする。

つまらないのなら、台無しにしてしまえば良い…

そうすれば、自然と災いが降ってくる。

俺はそれをただ見ているだけ。突っ立って傍観しているだけ。

勝手に周りがその災いであたふたと動いてくれるから。

それが、実に滑稽で俺を更に面白がらせてくれる。

誰一人として俺の企みに気づかない。

傍から見れば可笑しいのに、勝手に受けてくれる。

俺には何の苦も届かない。

強いて言えば”生”自体が苦であろうか。

「木瀬」

「何ですか？先生」

「この前のアンケートについて話がしたいのだが…」

「ああ、大丈夫ですよ。部活なら今日は休みなので」

「そうか。なら放課後生徒指導室にくるように」

「はい。先生」

呼び出されるのは当然だと思った。以前行った個人のことに
ついてのアンケート。

それは、俺にとって”人間性を問われる”アンケートであるため
回答が複雑なのだ。

恐らく意味が解らないのだろう。

普通に書けばよかったか。しかし、それも面白くない。

「しいづるー何やったんだよ。鬼頭からのお呼び出しなんて滅多に
ねえぜ？」

同級生にして、よく連む奴。城島謙。

先生に呼び出されてから予想はついていた。

何かがあれば何かと突っ込んでくる奴だからだ。

「ああ、多分この前のアンケートで、進路を書いてなかったから呼
び出されたと思うよ」

「何、お前決まってねえの？」

「うーん。そうだね。特に決まってるないし、進学でも就職でもいいし何をやりたいか何て全然考えたこと無いからね」

「うわーマジか。でもこの学校なら進学だろー普通。商業とか工業系ならまだしも就職はあんまり粹ないと思うぞ？」

「そうだね。よく考えないと後先後悔するかも」

「かもじゃなくて絶対だろーなー。あーやだやだ。こんな緩い学校きてまでピリピリしたくねえー」

高校1年生の1学期。

それもまだ、入学して1ヶ月とちょっとしか経ってないのにもう進路の話。

恐らくうんざりしている生徒は多いことだろう。

やっと中学から高校への進路のあれこれから解放されたというのに、すぐに高校卒業後の進路を考えなければならぬのだから。

「進路…ね」

半ば独り言のように呟いてみれば、聞こえなかったのだろう城島はどこかへと去っていった。

「さて、実験とやらは楽しんでいるのかね。あの変態ヤブ医者か」

精神病院に入院していたはずの俺が、何故通常の高校へ通っているのか。

それもこれも全てあの医者所の為。

親に交渉し俺を無理やりぶち込んだ先は普通の県立の高校。

男女共学。男女比は大体半分。普通科でこれといって変わっているところは無い。

俺にとって”無縁”の通常、普通の学校である。

おかしいものだ。

一度”精神病院”に入院し、”精神不安定”と判断され一生出ることができないと診断されたならば”出ること”はまず不可能。

しかし、その俺が今こうして外に出ている。

歩いている。

生きている。

話している。

通っている。

友人がいる。

可笑しいだろう？実に可笑的。

「まあ、それも楽しみだけだな。」

今の生きる糧。

”面白み”と対に”つまらなさ”。

それがタノシクて仕方ない。

人間のその安堵と、平和ボケした顔がいつしか歪むときが来たら彼らは一体どんな表情を俺に見せてくれるのだろうか？

狂いに狂った同胞殺してもさせようか。

狂乱。人を狂わせて血に染め上げてみようか。
それを見せしめ、孤独なテロでも起こしてみようか。

ああ、実に興味深い。

不意に、ポケットに入った携帯が震える。

メールか電話だが、相手が誰かなどすぐに解る。

俺の携帯に登録されたアドレスと番号はたった一つしかないのだから。

「何？」

人気の多いところから少々離れ、俺は何の挨拶もなしに電話に出た。

『楽しんでるかね？どうだい？つまらないと意地を張っていた高校生生活は』

「微妙な年でもうれしくないな。それと答えはN.Oだ。つまらない。高校生は同じ行動しかとらない。いい加減飽きるよ」

『それもまた一種の面白みだ。それが崩れ違う動きになるまで待つことも必要なことだ』

「余計なことだ。俺は生憎と我慢が出来な方だね。そろそろ本当に色々やつちやいそう」

『それはそうと、薬はちゃんと飲んでるかね？君のことだから面倒だとか、つまらないとか面白みがないだとか言って飲んでなさそう

だから心配しているのだが』

薬……と聞いて、ふと、そんなものあったつけ？と記憶が曖昧になる。
「飲む飲まない以前に薬なんてあったつけ？あと、さりげなく俺の言葉スルーしないでくれる？」

『薬は一番小さいダンボールの中に入れたよ。それは悪かったね。
まだやってはだめだよ。実験なのだから。君の精神と発言には興味深いのだから。刑務所なんてところに入ってしまったら私の楽しみがなくなるではないか』

「おい。本音漏れてっぞ。だから、嫌なんだ。このヤブ医者」

『ははは。まあいいではないか。友達はできたかい？恋人の一人が二人はできたのだろうか？』

その断言しきる言葉に暫し呆れた。
何故そこまで言いきれるのがいい加減疑問に思う。

「俺が作るとでも？適当に近寄ってくる奴と話してるだけ。女の告白とやらは丁重にお断りさせてもらってる」

『面白くないね。一回でもいいから女を知ってみたらどうだい？世界が変わるかもしれない』

「基本面倒くさいことには手を出さない主義でね。恋愛だとか愛情とやらに興味はない。それよりもいいか？いい加減飽きてきた」

『ふふ。君は忍耐がないねえ。まあまた面白いことがあったら報告

してくれよ。待っているからね』

「気持ち悪い。このクソヤブ医者が。」

ぶつんと切れた後に鳴る無機質な電子音。

俺はしばらく、会話の余韻に浸っていた。

得に意識しない学校生活に最近抵抗がなくなっていることは事実。

ずっと病院内での生活だったため、人と話すということができない……とまではいかないが会話がなかなか成立しなさそうかと思いきや案外普通に、まともに話すことができていた。

ただ、数年日に当たっていなかったのと運動を殆どしていなかったことから少々特別な理由ができていることが、面倒くさいことだった。

『高校生がつまらぬのなら少々外を覗いてみるといい。その街は独特でね、とても面白いものに”巻き込まれる”だろう。君にとっても退屈しないくらいにね』

医者の言葉を半信半疑で聞き、今だけ馬鹿正直に信じてみた。
”退屈”させたらただじゃおかない。

とはいいつつも、具体的に街で何をすればいいのかがさっぱりである。

暗い夜。

そのはずの街には、夜の静寂というものが無かった。

ネオンで彩られる店。

客を引き込もうと店外で声を出す店員。

至る所に、露出する女。

それに絡む柄の悪い男。

ところどころに、高校生だろ…とはつきりいつて解る顔の少年少女が戯れ繁華街を歩いている。

さっさと帰って学業にでも精を出せとも言いたいところ。

だが、それならば、同年代である俺も同じことが言える。

しかし、彼らの口元には煙草。そして、手には銀色やら金色やら、明らかに”子供”が飲むジュースの類ではないラベルの缶を持って

いた。

非行少年、少女とでも言う輩だろう。

この国の法はあって無いものだと思い知らされる。

これほどまでに、違反を重ねているような街に取り締まるために巡回するはずの警官はどこにも見当たらない。

まるで、ここは法律が通じず、警官ですら入る余地のない”独立国家”だ。

それが何故”退屈”をさせぬのだろうか。

たかが、人間が群れて派手に動いているだけ。

如何様にもできぬ、見ていて飽きるだけの通り。
興味などまったくもって持てない。

「見当違い…か？」

つまらない。

面倒なだけ。

退屈過ぎる。

募るものは更に俺を不快にさせた。

しかし、そこでまた世界が一転する。

「おらぁあああ……！何がタイムンだぁ！？よわっちいだけの駄犬どもが……！」

怒声。叫声。

溢れかえるばかりにその声は響く。

派手なファッション。

ファッションというよりかは彼らの条理、道理なのか。皆が皆、自分の個性を主張する独特の服装をしていた。

髪は派手に染め、目には様々な色。

口、鼻、耳、目などには鈍く光りを放つピアス、イヤリング系統のもの。

手足には様々なアクセサリ。

素肌を晒した者の腕や胸元には刺青といった人を恐怖させるものが入れられていたり。

「不良…ね」

”街の独特”さ、というのは人の非行によって作り上げられた辺境。誰の”権力”も入ることのできぬ自由過ぎる街。

言わば、犯罪の街。

（それを放置するのも変だとは思っが…）

その街で自分を開放することは暫しの退屈しのぎになるかもしれない。

己れの目で見て、己れの耳で聞き、己れの勘で見定める。

「まあ退屈かどうかは俺が決めることだけだ」

一人、明る過ぎる街、非行過ぎる街、騒ぎすぎる街に不似合いな男が笑う。

たった一人の不似合いな男がいたところで、周りの人間が気に留める分けもなくそれぞれの世界にのめりこんでいた。
男は笑う。

木瀬志鶴という男。
精神状態は不安定。

約6年間という精神科病棟への入院。
現在それを経て、”学生”として現代に更正。
しかし、それは仕組まれた人生。

彼に与えられた人生。
それを彼はどう生きるのか、見ものである。

「いいぜ。好きに暴れてやるよ」

その頭脳と、身体。

『君の体は不思議だよ』

全くもって謎さ...

今更、力を手に入れようなどとはまったく思わない。

ならば頭脳。

下手に喧嘩に巻き込まれ病院沙汰になるよりはマシである。

見抜いていたのか、ただの気まぐれか。とにかく、良いタイミング
でのヤブからPCなどの機材が届く。
まあ明らかに、解っていたのだろう。

”面倒ごとを嫌う者”が進んで面倒ごとをやるということはまずない。

ならば、そのままの状態で習得できる頭を使うだろうと。

PCの使い方はあるある程度解っていればいい。
あとは、プログラムとその関連する処理方法。

手っ取り早く知識を手にするには本やネット。
様々な人間がやりとりして、情報が流出しているネットは利用しない手はない。

最初は興味。

次に疑問。

更には理解。

深まっっていくそれに、次第に執着していく。

「数学が必要とか言うけどそこまで…だな」

理解。

そこにたどり着くまでそう時間はかからない。

何故なら、頭脳が可笑的い…からだ。

「異形だが、まあこういうときは役に立つものだな」

”良すぎる”または”悪すぎる”と人間は自分と違うものを異種な
る存在として見、軽蔑、差別する。

”天才”と称される者は敬われるが、それは人間のレベルで比べら
れるとちよつと突飛でている者に対してだけである。

つまり、突飛出すぎている者。

人間ではない…と謂れ、人を越えた未知数である者であれば皆その
者を”変人”どころか”人間”として扱わないだろう。

何故受け入れるのだろうか。

何故理解しようとしなのだろうか。

何故知ろうとしないのだろうか。

「だからこそ、人間は侵されやすい」

人間は単純。しかし、複雑。

だからこそその矛盾した人間。

それが更なる興味を生み出す。
そして、深まる世界。

「さて、遊ばせていただきましょうかね」

時に、笑い。
時に、怒り。
時に、泣き。
時に、憂う。

その男は全てを掌握するだろうか。
その男は全てを手に行うことができるだろうか。

ものはためし。

「うん。まあ飽きたらそこで終了ってことで」

それから始まる知識の理解。
受け入れ。

処理。

導入。

入力。

出力。

巡ったサイトはどれだけか。
手に取った本はどれだけか。

木瀬志鶴は片っ端から”頭”に入れていった。

絶対的な記憶。

世界に数人と言われるなかの一人。
しかし、彼はその中でも異例であるためあまり公表されていなかった。

小さな精神科の病院ですつとすごし、青春という人生の中の一部を
半分程度潰し、ずつと横たわって生きていた。

ほんのわずかな期間で、義務教育の教育課程を全て終わらせた。完璧なままに。

この世に絶対と完璧という言葉は通用しないのだという者がいるだろう。

それは至極言えることである。

彼でも”絶対”はありえない。”完璧”はありえない。しかし、それでも”完璧”にこなす。

”絶対”にやり遂げる。

彼だからこそふさわしいのだろう。

彼だからこそ相容れる言葉なのだろう。

「同じようなことばっかでつまらない……」

彼は”飽き性”である。

「あー怠い……」

彼は”面倒くさがり”である。

「ちっ…もういいや」

彼は”気まぐれ”である。

「大体は頭に入れたし、もういいっしょ。これからのことだし何とかなるだろうし」

誰が思うだろうか。

学校では男女ともに人気があり、真面目で気さくでその上頭脳明晰、容姿端麗、文武両道。

最後の文武両道とは、ある程度の嗜み程度だが、それほど動くような運動はしていない。

たかだか、弱小弓道部の部員で全国へ行けるような実力というよりはマダレな能力をもっているだけ。

本人にはまったくやる気はない。

勉強だって、授業を聞いて入れれば大体のところは大丈夫であり、教科書さえ一回目を通せばそれで終わりである。

そんな彼が、少々の非行に走る。

誰もが思わずとも、気にかからないことだろう。

隠れた天才。

出すぎている天才が更に天才を隠す。

これもまた、楽しみの一つ…かなと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0339y/>

狂喜乱舞

2011年11月24日17時46分発行